

工業立国・日本の礎いしづえとなった美と技術

# 大陸人を魅了して きた 日本刀

今日では、世界中に愛刀家がいる日本刀。伝来の鍛錬技術による切断性能と、日本刀が持つ凛とした美しさは、世界中から賛美されている。

日本の刀剣の存在が海外に知られるようになったのは、今から千年近くも前のこと。

宋、明代の中国で高い評価を受け、重要な輸出品目となった

日本刀は、鎌倉、室町、戦国時代にかけて大陸へと輸出され続けた。

文・伊藤三平（刀剣史研究家）

も普及してきて刀剣が造られたと考えられる。

奈良から平安時代中期にかけての遣隋使、遣唐使時代の輸出品に刀剣は見えないが、平安時代後期の日宋貿易では刀剣が砂金、硫黄（火薬の材料）と並ぶ輸出品となる。貿易の担い手として平清盛が有名だが、九州・博多の商人なども盛んに交易していたと伝わる。

宋に渡った日本刀は彼の地で高く評価されて「日本刀歌」の詩が生まれる。作者は歐陽脩（1007～1072年、北宋の政治家・文学者で唐宋八

大家と称される文章家の一人）とも司馬光（1019～1086年、北宋

## 初めて海を渡ったのは 平安時代後期

ある品物が輸出品になる要因はいくつかあるが、交易相手国がその価値・性能を高く評価していることが一つの条件となる。宋、明代の中国へ、膨大な数の日本刀が輸出された実態を明らかにして、今にいたる工業立国・日本の礎を築いた日本刀の価値を見直してみたい。

※

日本国内で製鉄が始まったのは、弥生時代後期か古墳時代という両説がある。おそらくは古墳時代から飛鳥時代にかけて国産鉄による鉄製品



明代に倭寇と戦った武将・戚繼光を祀った戚公祠（中国・福州）にある「倭寇襲撃」の図。日本刀を振るう倭寇の姿が描かれている。日本刀は、「悪役」倭寇の姿とともに広まり人々に恐怖心を与えることになった（写真／CPCphoto）。

の政治家・歴史家で『資治通鑑』の編者)とも伝わる。この一節を書き下し文で紹介する。

「宝刀近く出す日本の国。越買は之を滄海の東に得たり。魚皮に装貼す香木の鞘。黄白間雜す鍔と与に銅。百金伝えて入る好事の手。佩服して妖凶を禳う可し」

(宝刀が日本の国より出てきた。越の商人がこれを青海原の東に求めてきたが、それは香木の鞘に鯨の皮が貼ってあり、真鍮と白銅を取り混ぜて飾ってある。百金という大金を払って好き者の手に入った。佩服していると思魔を払ってくれるという) 海を渡った日本刀。宋王朝では魔

除けになると思われていたようだ。宋・明・清で日本刀に関して読まれた詩は、これまでに14篇が確認されている。

### 倭寇の武器として 人々に恐怖を与えた日本刀

次代の鎌倉幕府は御分唐船という貿易船を宋に派遣していたとされるが史料は少ない。民間による日宋貿易は太宰府を中心に南宋が滅亡するまで続いた。元寇(1274年、1281年)以降も、元は特に貿易を禁じることとはせずに、正中2(1325)年には建長寺の造営費用を工面する目的で寺社造営料唐船が派遣され、以降も関東大仏造営料唐船、住吉社

造営料唐船、天龍寺造営料唐船と室町幕府になっても続く。

この時代の日本の主要な輸出品は木材と硫黄で、他に砂金や日本刀などであった。

日本刀の素晴らしさが隣国に知れ渡ってきた時期に、日本刀が脅威となり恐れられる事態が出来た。それが倭寇である。

倭寇とは「倭(日本)が寇をする」という意味で、高麗で生まれた言葉である。南北朝時代から室町時代中期にかけて、主に朝鮮半島を襲ったのが前期倭寇である。対馬、壱岐、松浦地方などの海賊が食糧を略奪するために米の運搬船を襲い、沿岸部にも侵入して備蓄倉庫を荒し、人を拐かしたりした。

後期倭寇は、応仁の乱(1467)1478年後から文禄・慶長の役(1592)1598年)にいたる間に、主として東シナ海、南洋方面に幅広く活動した。明が海禁政策(朝貢に付随した形でしか貿易を許可せず、中国人の海外渡航は認めない)をしたことに抗して、中国沿岸民が違法を承知で通商に出たものが多く、当然に海賊行為を行っている。倭寇と名乗っても、実質は中国人が主体だったといわれている。

明には「北虜南倭」(北からの遊牧民の侵攻、南の沿岸地方の後期倭寇の跳梁)という言葉が生まれたほどで、

### 「七枝刀」は朝鮮半島からもたらされた?

輸出品がかつては輸入品だった例として生糸がある。江戸時代の半ば頃までは中国から多量の生糸、絹を輸入していたが、江戸幕府や諸藩は養蚕を勧め、その結果、生糸は幕末・明治から昭和初期にかけて日本の主要輸出品となり、輸出の70%~40%を占めるにいたる。

鉄、刀剣もかつては輸入品で、弥生時代から邪馬台国の時代には、鉄は朝鮮半島中南部の弁辰(弁韓とも言い、後の任那、加羅とも重なる)から輸入していた。『魏志』東夷伝の弁辰の条に「国、鉄を出し、韓(朝鮮半島中南部の馬韓、辰韓)・濊(朝鮮半島北部の日本海側)・倭(日本) 皆従いて之を取る」とある。

製品である刀剣も朝鮮半島のものが優れていたことは、『日本書紀』神功皇后紀五十二年の条に「百濟王の使者が、七枝刀一口などを献上して、谷那鉄山の鉄を永遠に奉納する」とあることでも理解できる。七枝刀とは石上神宮の御神宝の七支刀(国宝)であるとの説が有力で、東晋年号の泰和4(369)年の銘があり、『日本書紀』の記述は百濟王から倭王に献上だが、歴史学者は逆に下賜されたのではないかと論じている。

いずれにせよ七支刀に象徴される優れた鉄製品は、当時の日本にはない貴重な輸入品だったのだ。



平成26(2014)年に奈良県立美術館で開催された話題となった「大古事記展」に出展された国宝の「七支刀」(写真/朝日新聞社)。

### 知ってる?

明、高麗にとつての倭寇対策は財政を圧迫した。この頃描かれた絵には、日本刀を抜き、扇子を持つ人物が倭寇の象徴として登場するなど、襲われる民衆にとつて日本刀は恐怖の武器と認識されていたのである。

### 室町幕府の勘合貿易で 日本刀が重要輸出品に

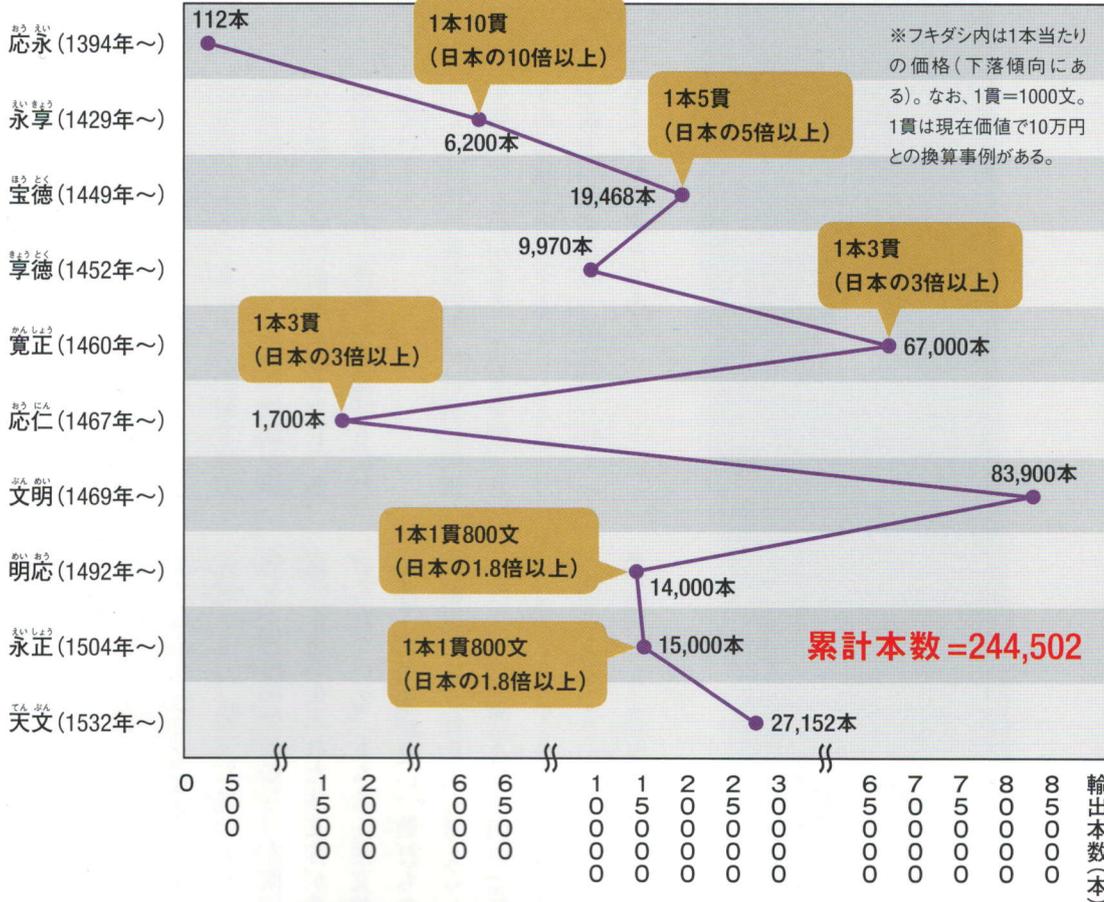
倭寇取締りを求める明と、新たな財源も欲していた室町幕府3代将軍・足利義満は国交を回復し、応永11

(1404)年に勘合符による貿易が始まった。

事前に政府間で取り交わした勘合符に幕府の印を押して持参し、明側では勘合符の底簿と照合して公認船かどうかを確かめた。明は東南アジア諸国、琉球とも勘合貿易を行っており、その一環であった。

室町時代に19回派遣され、当初は幕府の資金による船舶と商品であったが、次第に寺社や諸大名の船が多くなり、さらに表面上は幕府、寺社、

### 勘合貿易(日本・明)における刀剣類の輸出本数



勘合貿易が終了したのちの統計記録はないが、16世紀半ばからの南蛮貿易でも刀剣輸出はあった。また非公式の貿易ルートでの輸出も行われていた。

大名の船であっても、実質は堺・博多商人の請負によるものになっていった。なお九州諸国の守護・領主は勘合貿易に参加する以外に、独自に琉球、朝鮮半島、東南アジア、倭寇と密貿易

をしてきたことが確認されている。この勘合貿易において、硫黄、刀剣、銅、扇などとともに主力の輸出品となったのが、刀剣であった。勘合貿易における刀剣輸出実績を

※グラフのデータは『日本刀大百科事典』(福永酔剣著)の「輸出刀」より。「この数字は資料によって異なる」の注記がある。

まとめたものが、上のグラフである。

勘合貿易には進貢品の他に、

政府との間で取引される公貿易と民間取引に委ねられる私貿易があった。公貿易は中国上流階級の需要品と軍備上の必要品が対象で、当初は蘇木(薬品、染料などに使われ、日本は中継貿易で入手)、銅、硫黄、刀剣類が対象であったが、応仁(応仁元(1467年)以降は刀剣が中心となった。明への膨大な刀剣輸出に関して、「倭寇の武器の日本刀を根こそぎ絶やすためではないか」という推論もあるが、公貿易品であることからわかるように、明の軍備として輸入したものと考える。中継貿易(日本→琉球→中国)を盛んにしていた琉球からも日本刀は多く輸出されている。

#### 輸出刀剣の価格と 当時の新作刀剣の価格

かくも膨大な量の日本刀が輸出されたのは、日本刀の鍛錬技術が優れ



上/遣明船を描いた切手。室町幕府が明に派遣した勘合貿易船で、日明貿易に用いられた。右/足利義満(正平13(1358)年～応永15(1408)年)。室町幕府3代将軍。南北朝合一を果たして幕府権力を確立させ、鹿苑寺(金閣)を建立。室町最盛期の政治・経済・文化を築いた(東京大学史料編纂所蔵模写)。

ていたこともあるが、材料となる鉄を還元によって製産するためには膨大な森林資源が必要となり、その点で雨量が多い日本の森林復元力が有利だったからである。順調に輸出され続けていた日本刀だが、永享から天文(1429～1555年)までの間に輸出刀剣の価格は下落している。その理由は①輸出

量の過剰、②明側の輸入制限、③大量生産による品質の粗悪化などが推測されている。

輸出刀剣の利益として、宝徳の遣明船の例だが日本で八百文から一貫文の刀が、明では五貫文になったとの史料がある。永正の遣明船では刀剣の価格をめぐって日本の使節が明の官憲と執拗に折衝を繰り返して、価格を前回並みに維持した逸話も伝わっている。

この時代の備前の刀には茎に代価を切ったものがある。代金を切ったものは輸出用とする説もあるが、日本武士の注文銘も一緒に切られていることから誤りである。

### 室町輸出用日本刀を製産した鍛冶集団は？

これだけの日本刀はどこで製産されたのであろうか。刀剣大産地の備前では永正以降になると「備前長船祐定」と言う簡素な銘の刀剣が数打あり、「備前国住長船与三左衛門尉祐定」と俗名を入れた注文銘が造り分けられている。もちろん注文銘の刀のほうが出来が良い。数打ちの一部が輸出にされたとも考えられる。古来、刀剣界では、中国の『武備志』に「兼常と号する者、最も嘉なり」の一節があることが知られていた。美濃鍛冶として和泉守兼定(之定)、孫

六兼元に次ぐ名工と評価される兼常が輸出刀剣の中で名声を博した証左とされている。

今回、『武備志』の原文に当たると巻102に「號兼常者襄嘉」の一節があることを突き止めた。この辺りの文章は難読の漢文で私には解読できないが、文中には長門、山城、備前などの国らしい単語が見えるから、これらの国の鍛冶の作品もあつたのであろうか。

なお信国に明の年号「成化二(1466)文正元年九月」年紀の作品があるが、この刀は大友氏に呼ばれて豊後で鍛刀し

た輸出用作品と考えられる。また兼先に「濃州関住兼先 大明国良藏為今世守身作」と銘した作品が存在する。

末古刀期の中国地方から九州にかけて生まれた鍛冶集団や、堺が集積地となった畿内と周辺国の鍛冶集団も輸出用刀剣を製作していたのではなかろうか。



永正十二年紀で代五貫文と切られた祐定(『日本刀の歴史と鑑賞』小笠原信夫著)より転載。

### 茎に代付けが銘されている刀

刀工	種別	長さ	年紀	(西暦)	代付け	備考	出典
則光	刀	2尺3寸8分	寛正5年	1464	打代伍貫		①
則光	脇指	1尺7寸1分	寛正□年	1460~66	打代伍貫		①
則光	大脇指	不詳	文正元年?	1466	代伍貫文	上と同一の可能性有り	②
勝光	刀	不詳	文明9年	1477	代二十貫文	「土屋押形」に所載	①、②
忠光	脇指	1尺9寸6分	文明16年	1490	代五石(五貫文)	板倉次郎三郎と注文銘	①
忠光	刀	2尺2寸	延徳2年	1490	代千疋(十貫文)		①、②
勝光	短刀	6寸7分	永正3年	1506	代一貫五百文		①、②
祐定	刀	2尺1寸9分	永正12年	1515	代五貫文		①、②、③
祐定	刀	2尺3寸4分	永禄2年	1559	代十貫文米八石	天神之門岡本重代と注文銘	①
清光	短刀		天文15年	1546	代百疋(一貫文)		②

出典①「代付銘のある末備前刀について」横田孝雄著『刀剣美術』470号

出展②『刀鍛冶の生活』(福永醉剣著)

出展③『日本刀の歴史と鑑賞』(小笠原信夫著)